

この人に会いました

「井上保健医療センター長」

3月24日の夕方、井上保健医療センター長は役場職員への一時間の講演の後、私たちのインタビューに応じてくださいました。白衣のポケットに聴診器を入れたまま、大急ぎで職場から抜け出して来たという姿でした。

・なぜ湯沢を選んだのですか？

私は大学（京都大学）に残るより、本当に私を必要としてくれる地域で働きたいと思っていました。そこで自治医大の地域医療学教室で研修した後、岐阜の山の中の小さな診療所に赴任しました。そこでの診療活動は充実してはいたのだけれど、反面ストレスもありました。医師は私一人なのでいろいろな意味での責任のすべてがかかってきたこと、所用で診療所を離れてもその間に何かあつ



たらどうしようかという不安。入院が必要となると患者さんは自分の手を離れてしまい、患者さんの責任を最後までとれない辛さなど……。

次は小回りの効く小さな病院で働いてみたいと思いはじめた時に湯沢町保健医療センターの話が来たのです。

・湯沢町保健医療センター（湯沢病院）をどんな病院に育てていきたいと思っていますか？

私は医師が外に出る事をもっと大事にしたいと思うのです。在宅訪問診療は家族の負担は大きくはなるけれど、患者さん

の選択肢は増える事になります。

診療の方法が増えるだけではなく、患者さんの亡くなり方が選べる事になります。病院でしか亡くならないのではなく、自宅で家族にみとられながら亡くなる事も出来るのです。

患者にとっても在宅で患者さんを診るのは勉強になります。訪問診療は楽しいし、やりがいがあります。私は研修に来た若い医師や医学生すべてを訪問診療に同行させるようにしています。

医師に地域医療、訪問診療を重視するという思想があれば、スタッフもそういう考えの人が集まってくる。そうすればリハビリや訪問看護など在宅でも医療ができるようになりやすい。そうして地域としての医療の充実を図っていきけると思います。そのうち、医師の仕事は医療の部分が少なくなる予防の部分が多くなるだろうと思います。なるべく元気なままで年をと

って、本人にとっても家族や行政にとっても負担が少なく、みんなが満足して最期を迎えられるようになるのが理想です。そういうようになるお手伝いをするのが医師の仕事になるのでしょうか。

湯沢は郡の端っここの町で、端っこというのはデメリットですが、町村合併をしないという選択をしましたので、一つのエリアとして完結しやすいというメリットもあります。私達としては活動しやすい環境だと思います。救急という点では、病院のできることは限られています。重大な疾患を見逃さないことです。湯沢で出来る事はどこまでなのかをしっかりと見定めて、対応できなかつたら勇気をもって大きな十分な施設のある病院に送る。それが大事な事だと思います。今のスタッフは十分にその能力のある医師達だと思います。

（聞き手・文責

南雲和夫、佐藤守正

編集後記

「絆（きずな）」

湯沢町は今年、観光立町宣言を行う。「心」意識の再認識を唱っている。全国童画展に42人の思いが作品として今年も寄せられた。審査に当たられた各先生は、「日本の童画は間違いなく、今この湯沢の地から発信されている。素直な作家のやさしさ、愛、変わらざる心不易流行、それが湯沢の童画展であることを確信する」と言われた。村山実行委員長を中心とした各委員の思いが通じ合った瞬間であった。川上四郎氏の孫である壮太氏の「今夜は旧友と酒を交わす」と、にこやかに言った顔が記憶に残った。

湯沢を離れた多くの友人は、決まったように湯沢は変わったナーと言う。友人の心の端には、いつも湯沢の地が生きつづけているのだろう。

四月、里山一面に生命が息づきここの雪国にとって一番、幸せを感じる春を迎えた。私はこの湯沢町が好きだ!! 宣言の基本はごくごく当たり前のそこから始まるかと思うのは私だけだろうか。

広報委員 南雲 和夫

編集

湯沢町議会
広報対策特別委員会